

西日本正教

西日本主教教区 宗務局

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会 内

電話・FAX (075) 231-2453

郵便振替口座 01030-5-18547

No.141
Spring,2017

京都生神女福音大聖堂 特別公開



～内容～

京都生神女福音大聖堂特別公開

西日本主教教区主催 連続講演会

『ハリストスに倣いて』 各教会ニュース

各教会のバザー、名古屋教会の大聖水式 その他



2016年10月28日(金)～11月7日(月)

会場 京都ハリストス正教会

京都聖堂に拝観者多数来会

ご協力ありがとうございます

十月二十八日(金)～十一月七日(月)十一日間、京都府内の文化財「京都非公開文化財特別公開」を実施。主催・公益財団法人京都古文化保存協会、後援・京都府・京都市、特別協力・朝日新聞社、「京都生神女福音大聖堂 特別公開」が、事故なく無事に開催された。

☆開催の目的はつぎのとおり

一 正教会(オーソドックス・チャーチ)の名称

二 日本ハリストス正教会、京都ハリストス正教会の名前を全国の皆様に広報し

三 正教会と京都聖堂の魅力を一人でも多くの皆様に体験していただき

四 これからの福音宣教の一助として役立てたい

教区後援・協賛行事として、啓蒙用リーフレット「教区マップ」一万五千枚、「正教会とは」七千枚、教区頒布品多数を頒布。

期間中二回の主日聖体礼儀も、皆様のご協力でスムーズに執り行われた。

教区各教会司祭・信徒はじめ京都執事会・婦人会はじめ奉仕者の皆様に深く感謝申し上げます。

聖堂拝観者は少ない日で約千人、多い日は約三千人、計2万1千425人。今後の宣教に資する糧といたく思います。

朝日新聞（デジタル含）はじめ読売・毎日・京都新聞等の各紙、るるぶなどの旅行雑誌、クラブツーリズム・JTB・日本旅行等の団体旅行、福井・よみうり・NHK・朝日・京都TV等、朝日カルチャー教室等が積極的に取り組んでくださった。深く感謝。

（及川記）



西日本主教区

特別連続講演会

「イエス・キリストとはいったい何者か」キリストをめぐる神学論争」

西日本主教区特別連続講演会の一環として、九月一九日、伊藤神父は「イエス・キリストとはいったい何者か」キリストをめぐる神学論争」という表題で西日本主教区センター（京都教会）にて講演しました。連続講演会の聴講者は回を重ねることに増えており、このときは五十名ほどの参加がありました。

聖体礼儀で唱えるニケア・コンスタンティノープル信経の中の「父と一体にして」とはどのような経緯でこのような表現に固まってきたのか、と言う歴史的な経緯を、ウーシア、ヒュポスタシス、

ピュシスというギリシャ語を用いて解説しました。これらの術語はもともとほぼ同じような意味でしたが、神やハリストスについて厳密に説明するためにギリシャ哲学の用語法を換骨奪胎して用いられました。

「神学論争」といえば、内容と



結論のない議論を延々と続けるといったイメージがありますが、キリスト教の教義を確定しようとしていた古代においては、キリスト教の本質、救済の根幹にかかわる問題の議論でした。それはどうしても難解になってしまいました。長い時間をかけて練り上げられた豊かな内容を持っていきますので、これを機に紹介できたことはよい機会であったと思います。

終わってからの質問も沢山あり、大幅な時間超過になったことから、難解なテーマにもかかわらず予想外の関心の高さがかげえました。

「正教徒から見たアイコン」

一月三日（祝日）には同じく西日本主教区センターにて伊藤神父は「正教徒にとってのアイコン」と題して講演しました。

当日は、京都市の秋の文化財特別公開企画イベントが開催中で、

京都教会の聖堂も特別公開の対象となっており、大勢の拝観者が来会していただきました。講演会も、当日拝観に来た人々の参加もあり、九十名ほどの盛況になりました。

キリスト教他教派と比較して、まず目につく東方正教会の特徴としてアイコンを用いての祈りがあります。アイコンは美術的観点から現代では高く評価され、展覧会なども催されることもあります。



場合アイコンは西洋美術史の中に位置づけられます。しかし正教徒にとっては、美術的観点よりもむしろ祈祷の媒体として、日常生活で欠くべからざるものとして大切にしなければならぬものです。講演は正教徒から見たアイコンのさまざまな側面を紹介しました。

講演はアイコンの歴史には始まり、アイコンの神学的意味の説明へと移りました。ダマスコの聖テオドロスによれば、アイコンが描くのは神性と人性が一体となった一つのハリストスというヒュポスタシスであり、目に見えない神が目に見える人の姿を取った「藉身」という事実がアイコンの神学的根拠です。さらに講演はアイコンの特徴について解説し、最後に文化財特別公開の対象となった京都教会を例に挙げてのアイコンスタスの説明で終わりました。

九州管区赴任のご挨拶

主の御名によりてご平安をお祈り申し上げます

昨年11月17日より九州管区副司祭として奉職させて頂いておりますワシリイ杉村太郎です。まだまだ未熟な事が多く、ハリストスの愛に倣い、これから良き司祭・牧会者として成長していけるよう努めて参ります。

隠遁者聖フェオファンが「**祈りとは限られた時の業ではなく、常なる行いの業**」と仰っているように私達の



日常の根底には常に神様との対話可能性が啓かれ、そして私達の存在は護られたものであることを忘れてはなりません。絶えることない神様の恵みに感謝し、そして多くの人々に福音が届けられますように。

神との和、人間との和、神への愛、隣人愛を忘れずに奉職に努めて参りたいと思っております。九州管区の発展の為、これからも皆様のお支えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

九州管区副司祭ワシリイ杉村太郎

ハリストスに倣いて

司祭 ワシリイ 杉村 太郎



新約聖書に記されているハリストスの福音は食の場面においても顕著に知

ることが出来ます。

聖書には食の場面はとて多く記されております。カナの婚礼（イオアン二・一〇〜一二）、五千人の給食（マルコ六・三〇〜四四）、徴税人の召命（マトフェイ九・九〜一三）、罪深い女を許す（ルカ七・三六〜五〇）、機密の晩餐（マトフェイ福音書二六章一七〜二九節、マルコ福音書一四章一二〜二五節、ルカ福音書二二章七〜三〇節、イオアン福音書一三章）など。そして正教会においても毎回の聖体礼儀を通して領聖が守られています。日常生活の中でも私達は「食」を無視することは出来ません。なぜならそれは命を繋ぐものだからです。その意味では「食」とは生命の核心的働きです。また、「食」には単に燃料を補給するだけの意味に留まりません。一般的にも「食」は実に様々な学びを人間に与え、そして成長させます。生命に対するいたわりや感謝、謙遜などです。

福音書の中でもハリストスは「食」の場面を通して実に大切な事を私達に教えておられます。「放蕩息子の譬え」においてその一例が挙げられます。

家を出た息子は異郷の地で放蕩の限りを尽くし、豚飼いの身分にまで転落しました。レヴィト（レビ）記一章にはトラーにおいて豚が汚れた動物と規定されていることが記されており、つまりこの息子はユダヤ社会にとつて汚れた者＝異邦人となったのです。しかしその息子を父親は子牛料理の宴会を開き、そのまま迎え入れたのです。まさにこの譬え話は、ハリストスの食卓エネルゲイアの在り方を我々に教えております。そのことは私達に〈和解、謙遜、ゆるし、希望、兄弟（姉妹）的共生の心〉を教えます。「食」とは広義に「存在の世話」でもあるのです。

また、ルカ七章三九節やルカ一五章一節以下などにも「食」を通してユダヤ的体制を突破する場面が記されており、ます。

旧・新約聖書に記されている伝統的ユダヤ人共同体における三大祭（逾越祭、仮庵祭、七週の祭）等にも「食」の場面が基軸としてあります。しかしその実態は異邦人や遊女、税吏人、病者、貧者などは会食出来なかったという事実がございます。その理由としましては、トー

ラー（律法）において「清浄規定」の遵守がユダヤ共同体と異邦人、あるいは潔いユダヤ人と潔でないユダヤ人とを区別することだったからです。しかし、ハリストスは食卓の交わりに彼ら（罪人ら）を招き入れました。そうしたハリストスの行動に対し当時フアリサイ人や律法主義者たちからは非難されましたことが記されております

ハリストスのこうしたエネルギーは、静的な価値観（規範）や判断、法を突破させ、異化作用を通して呼び起こし、他者との出会いの場を与えます。

生命の歴史の根源には常に新しい生命（他者）との出会いがあり、共生があり、そこから新たな生命が生み出され、そして育まれてきました。我々は日常生活の至る所で意識的にも無意識的にも二項的差異の価値観に支配されて生きております。

ハリストスのこの精神は正教会においてしっかりと守られております。その姿勢として先ず第一に信仰世界の内容を厳密に構造化したり、言語システム化、定義づけなどはしない、ということなのです。

勿論、正教要理、正教定理など誤った方向に進まない為の指針は示されます。しかし、「正教徒の人生の目的は聖神を獲得すること」であると聖セラフイムは述べておられる如く、正教信仰は新たな生命の生み出す真理の息吹によって変容していきます。聖神降臨の出来事で示されているように被造物世界の相生的地平が実現していかなければなりません。一方に他を還元することなく、それを突破し他者の地平を披いていくのです。狭い固定された観念への固執は争いや分裂を生むだけです。

そして、まさに聖使徒行実一章一―一五節では自閉的ユダヤ共同体を裂開し、ハリストスによる「（開放的）食・存在」への転回が記されております。

この箇所で記されているように私達も「親愛の食」へと結晶化されるべく福音伝道の和を広げるべく努めていかなければならないのです。

食べものの中には

食べものの中にはね、

世界があるんだ。

一つ一つの食べものの中に

一つ一つの生きられた国がある。

チョコレートの中に国があるし、

パンにはパンの種類だけの世界がある。

真つ赤なビートのスープの中には

真つ赤に血を流した国がある。

味があつて匂いがあつて、物語がある。

それが世界なので、世界は

食べものでできていて、そこには

胃の腑をもつた人々が住んでいるんだ。

テーブルの上に世界があるんだ。

やたらと線のひかれた地図の中にじゃない。

きみたちはきょう何を食べましたか。

どこにどんな旅をしましたか？

長田弘著 『食卓一期一会』より

「食」には自己圏を超えた他の存在との交わりがあり、人間関係や社会との繋がりを広げていく可能性に満ちているのです。

各教会ニュース

西日本教区センター

○一年点検

十二月六日（火）午前、創真建設
西山社長、建設時の現場監督伊原
一級建築士、電気関係の責任者、
神父の四者が、二時間みっちり一
階、三階、外装・水回り等の全て
を視察。白化現象（外装の白いシ
ミ） 扉開閉不具合、一階ホール
床面電気コンセントの開閉不具
合、一階台所横の小和室のエアコ
ンの効き具合等については、一月
以降対応することが決まった。

○トイレ物置棚設置等増設

昨年来利用される皆様のご要
望・ご提案により、教区司祭会議・
京都執事会でも協議の上、男女・
多目的トイレそれぞれに物置の棚
を設置することが提案、実施が決



定。

台所横の小和室のエアコンの効
きが悪いと言うことで、教区セン
ター一年点検時に創真建設と協議
しましたが、人目につかない箇所
に室内ファンを取り付けることで
改善を企図している。

西日本教区後援

広島地区宣教祈祷集会

聖体礼儀に二十五名参加

本年六月に開催された西日本主

教区
定例教
区会議
では、
「小規
模教会
の活性
化」が
今後の
課題と
して問



題提起されました。
今回の祈祷集会ではその問題提
起に応えた試みが今回の集会で
す。

従来は毎年十一月二十三日（祝）
に大阪教会から管轄神父が出張
し、ホテルの一室でパニヒダを中
心に行ってきた集会を、府主教座
下のご祝福のもと市内に施設を借
り、地元の信徒にはほとんど与る

機会のない聖体礼儀として行いました。また司祭の出張にかかる費用・会場費は全額教区負担されました。

会場は広島市の中心部にある袋町学区会館。八畳の和室を二部屋借り、教区で保有する組み立て式のテーブルを宝座・奉献台の代用として二台置き、金色の覆いを掛け聖体礼儀にふさわしく整えました。参加者は邦人信徒、邦人と結婚し広島に在住する伝統的正教団出身の信徒、求道者の一家、司祭夫妻を含め二十六名。七名の幼児・児童たちも参加しました。

礼拝は全員が用意された楽譜を手にも、不慣れながらも、連祷ごとに異なった国々の「主憐れめ」で応答し、さながらアメリカやヨーロッパへ移民していった伝統的正教団の人々が、聖堂も会堂もない時代に、ガレージなどに集って行ったと伝えられる聖体礼儀を彷彿

とさせてくれるものでした。説教は日本語で行われましたが、英語と大阪教会のロシア出身信徒が協力して訳してくれたロシア語テキストも配布されました。

コリンフ前書に「あなたたちが教会として集まるとき」（11:18）とあります。教会らしい何の飾りもない一室に、何年かぶりに御聖体をいただく喜びと期待で胸を弾ませた人たちが集うとき、このパウエルという言葉がいつもの現実感をもって思い起こされました。

このような試みが全国各地で広がりますよう。

（司祭ゲオルギイ松島報告）

聖歌学びの会（福岡伝道所）

二〇一七年一月九日、福岡伝道所においてエレナ廣石姉（名古屋ハリストス正教会）ご指導のもと「聖歌学びの会」を行いました。十二名の参加者で伝道所も満杯と



なりました。皆さんとても熱心に廣石姉のご指導を聞いていました。学びの会では主日聖体礼儀とパニヒダの聖歌を中心に練習いたしました。大変実り豊かな時が与えられました。エレナ廣石姉に感謝。

名古屋教会バザー



一月六日（日）、名古屋教会では毎年恒例のバザーが開催されました。今年は晴天にめぐまれ、多くのお客様さまに来会いただき、盛況のうちに終

了することができました。婦人会の方々を中心として、一週間前からほぼ毎日ご奉仕仕いたいただいた成果です。焼きものコーナーで



は、五平餅、つくね、ねぎまなどが、イートインコーナーではジョージア、ロシア、ルーマニアなど各国の珍しい料理を味わうことができました。売り上げもほぼ例年通り三〇万円から四〇万円のあいだです。バザーの後に反省会があり、来年以降の改善点を話合いました。来年さらによいバザーにしたいと思います。

神戸教会バザー



神戸教会では今年も一月二三日（水・祝）にバザーが開催されました。この日は急に気温が低くなり、昨年よりは来客が少なかったですが、近隣の住民の方にペリメ

ニやピロシキ、ウズベキスタンの珍しい料理等を提供し、喜んでいただくことができました。

大阪教会バザー



少々肌寒い日となりましたが、一月六日（日）、隣から多くの人が来会し、賑やかにバザーが行われました。物品販売、婦人会の食事提供やリメイク着物の他に、去年から始

めた「お宝コーナー」も好評でした。野外では無料提供の綿菓子や長蛇の列。たこ焼き、アメリカン



ドッグ、教会学校提供のゲームコーナーなど、子供も大人も楽しんでいました。



名古屋教会神現祭

名古屋教会では一月二二日に神現祭をお祝いし、大聖水式の後、神現聖堂の堂祭として餅つきをしました。餅は名付けて「神現餅（しんげんもち）」。皆でついたお餅は、雑煮、安倍川、あんこ、きなこ、大根おろしなどでいただきました。心配された天気にも恵まれ、楽しいひとときを過ごすことができました。

半田教会では一足早く一月八日に神現祭をお祝いしました。この日はあいにく雨となり、残念ながら十字行もとりやめにして、聖堂内での大聖水式となりました。



『主よ、爾がイオルダンに洗を受くる時、聖三者の敬拝は顕れたり、蓋父の声爾を證して至愛の子と名づけ、聖神も鳩の形に顕れて言の確なるを示せり。現れて世界を照ししハリストス神よ、光栄は爾に帰す。』



大聖水式



今年も各地で神現祭が祝われ、大聖水式が行われました。イエスはイオルダン河の水に入られたことで、物質を、そしてこの全世界を清められました。

春季セミナー

『神に近づく～聖人たちの歩む道』

2017年3月20日(月・祝) 10:30~15:00

会場 大阪ハリストス正教会 信徒会館ホール 参加費 1000円(昼食代込み)

午前の部は、ワシリイ杉村神父様が「救いとしてのテオシス」という題で、午後の部は神戸外国語大学教授のイーゴリ清水先生が「聖人伝を読もう、祈ろう、生きよう」という題でお話しをさせていただきます。定員は100名(先着順)となっています。お申込みは各管轄司祭までです。よろしくお願いいたします。